論文

大学生による紙芝居制作・上演を通した犯罪被害者支援ボランティア活動に関する考察

Consideration on Volunteer Activities for Crime Victims through Kamishibai Production and Performance by University Students

上地 玲子 [1)]

Reiko Kamiji

キーワード：犯罪被害者支援，ボランティア，紙芝居
Key Word: support for victims of crime，volunteer，Kamishibai

はじめに

日本では長年犯罪被害者への支援が少なく、法制度も不十分であった。しかし、1998 年に民間組織「全国被害者支援ネットワーク」が設立され、徐々に加盟団体が増え、現在ではすべての都道府県に加盟団体(被害者支援センター)が設置された。また、徐々に犯罪被害者の立場に寄り添った法制度が整いつつあり、行政の役割も大きく変化してきているが、犯罪被害者や遺族にとっては十分な支援として機能しないことも多い。金子(2006)は「犯罪被害者支援は国や地方公共団体が取り組むべきであるが公的な制度で小回りが利かない部分はボランティアが補うべきものも多い」と述べており、行政と民間団体が連携しながら取り組むことによって、犯罪被害者の方への支援が充実することが考えられる。

2004 年に国が「犯罪被害者等基本法」を策定し、警察庁が 2016 年に「第３次犯罪被害者等基本計画」を策定している。具体的な施策として「国民の理解の増進」の中に、犯罪被害者支援に係る社会参加活動についての大学生の理解を深めるため、大学との連携強化を図る旨が盛り込まれており、各都道府県における警察本部において「学生ボランティア」などの名称で学生をボランティアとして活用している。岡山県警本部県民応接課犯罪被害者支援室（以下、「県警」と称する）では、それまで個々に活動していた学生ボランティアを発展させ、大学の垣根を越えた連携を円滑に行えるように県警が事務局を担い、2017 年に全国初の犯罪被害者支援大学生ボランティア連絡会「あした彩」[i]を発足した。

多くの大学には様々なサークル活動があり、「ボランティア」に関連する団体が設置さ

---

1) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

i 2019 年 1 月現在では 11 大学が連携している。

れている場合も多い。本学においても「ボランティアサークルあい(以下、「本サークル」と称する)」という名称のボランティアサークルがあり、筆者が顧問を務めている。本サークルでは、障がい児支援活動、高齢者支援活動、児童養護施設支援活動など幅広く活動をしている。また、筆者が「岡山県警察本部犯罪被害者支援等カウンセリングアドバイザー」を務めていることから、本学学生と共に県警と犯罪被害者支援活動にも積極的に参加するようになり、2017 年度から本サークル内に「犯罪被害者支援チーム」(2019 年 1 月現在で登録学生数約 30 名)を結成し、「あした彩」のメンバーとして活動している。

安達(2009)は、犯罪被害者支援の現状では、民間支援団体におけるボランティアの存在が非常に重要であると述べている。本サークルにおける犯罪被害者支援活動の中心は、犯罪被害の実話をもとに作成したオリジナル紙芝居を用いた上演である。警察等において年少者に対する防犯教室等では紙芝居を用いるケースは多い。しかし、これらの活動がどのような意義があるのかについての詳細な研究は少ない。また、犯罪被害者の心情を伝える紙芝居は少なく、大学生が作成した紙芝居を用いた犯罪被害者支援活動に関する研究論文はない。そこで、本研究では、本サークル「犯罪被害者支援チーム」における紙芝居制作・上演活動を中心に、大学生が犯罪被害者支援をすることに関する考察を行う。

紙芝居を通した犯罪被害者支援活動報告

１．紙芝居制作のきっかけ

2016 年に当時の本サークル部長が小谷氏の被害者遺族講演[ii]を聞き、「亡くなった子どもの命のバトンをつなぐために、大学生の自分たちにもできることがないだろうか」と顧問に相談したことがきっかけとなり、紙芝居制作に取り組んだ。当時在籍していた部員に声をかけて制作チームを作り、県警のからも多大な協力を得た。

紙芝居は「まおちゃんの新しい靴」と題して、命の大切さを伝える教材として活用することとした。

２．制作

ストーリー担当､イラスト担当､デジタル化担当の 3 名の学生が制作活動の中心となり、本ボランティア部員にも協力を得て取り組んだ。

犯罪被害者支援の啓発活動として、低年齢にも活用できる教材になるように本サークル顧問である筆者と試行錯誤しながら構成した。作成する中で特に気を付けた点は次の 3 点であった。1 点目は、事故の被害に遭った経験のある子どもが見てもトラウマを引き起こさないようなストーリーとイラストにすること。2 点目は、モデルになった児童らは交通ルールを守っていたけれど悪質なドライバーによって命を奪われたことが分かる内容にすること。3 点目は、命の大切さが低年齢に伝わる内容にすることであった。また、仕上げるまでにはモデルになった被害者遺族および県警の協力を得た。

---

ii　2012 年に京都府亀岡市で無免許運転居眠り運転をしていた少年の車によって集団登校中の児童ら 10 人が死傷した事件が発生。亡くなった小谷真緒ちゃん（当時 7 歳）の父親である小谷真樹氏が犯罪被害者遺族講演を行っている。

(1) 紙芝居

2017 年度に紙芝居を作成した。2018 年度には英語訳担当の学生 1 名が加わり、本学の英語担当教員らにも協力を得て英語訳を追加したものを完成させ、A3 サイズ、13 枚の構成で製本化した(図 1)。

絵の具はホルベイン透明水彩絵具を使用して柔らかい印象を与えるように工夫し、効果音はフリーで使用可能な「魔王魂」サイトから心理的に負担を書けないような音源を利用した。

図 1　紙芝居（一部）

(2) デジタル紙芝居データ

図 1 データを元に、2017 年度に上演活動用として、朗読入りと朗読なしの 2 タイプの動画に編集したデジタル紙芝居（約 5 分 30 秒の mp4 動画ファイル）を作成した(図 2)。朗読は、イラスト担当者が兼ねた。

図 2　デジタル紙芝居の画像（一部）

(3) 絵本

2018 年度に紙芝居データを絵本スタイルに編集し、PDF データ化した(図 3)。

図 3　絵本データ（一部）

３．活動の取り組み

(1) 作成した紙芝居を用いた活動

図 2 のデジタル紙芝居を使った上演活動を実施した。2016 年度には、A 市内 B 保育園において、年長を対象に初披露し(図 4)、その後、多数の講演会等において上演をした(表 1)。これらの取組は、テレビや新聞等でも多数取り上げられた(表 2)。

図 4　2017 年 2 月　A 市内 B 保育園における
デジタル紙芝居上演風景

図 5　2017 年 11 月 26 日　京都府「生命（いのち）のメッセージ展」におけるデジタル紙芝居上演風景

図 6　2017 年 11 月 18 日　紙芝居のモデルになった小谷氏を本学に招いた講演会にて紙芝居制作経緯報告風景

図 7　2017 年 12 月 7 日 A 市内イマージョン指定校の C 小学校校内テレビ放送を通じた英語版デジタル紙芝居上演風景

表 1. 2016 年度から 2018 年度のデジタル紙芝居上演活動・メディア一覧

	活動日	活動内容	対象	メディア
1	2017.2.8	A 市内 B 保育園 「命の大切さ啓発活動」	A 市内 B 保育園年長	2017.2.8 NHK 岡山「もぎたて」 2017.2.8 OHK「スーパーニュース」
2	2017.4.14	朝日新聞取材対応		2017.4.19 朝日新聞全国版 2017.4.20 朝日新聞岡山市版
2	2017.6.14	A 市内 C 小学校上演会	A 市内 B 小学校 低学年	2017.6.14 テレビせとうち 「TSCnews5」 2017.6.14 山陽放送「RSK イブニングニュース」 2017.6.15 山陽新聞岡山市版
3	2017.7.22	D 中学校区育成 協議会上演会	D 中学校区内児童・ 生徒・保護者等	2017.7.23 朝日新聞岡山市版
4	2017.8.25	F 市内 G 中学校：小学生への読み聞かせ活動実践指導	F 市内 G 中学校生徒	
5	2017.9.15	A 市内 H 保育園 「命の大切さ啓発活動」	A 市内 H 保育園 年中・年長	
6	2017.10.2	F 市内 G 中学校：小学生への読み聞かせ活動実践指導	F 市内 G 中学校生徒	
7	2017.11.18	本学公開講座犯罪被害者 遺族講演会での上演	本学学生・教職員・ 一般	2017.11.18 NHK 岡山「もぎたて」 2017.11.20 NHK 岡山「もぎたて」
8	2017.11.26	I 市犯罪被害者支援 「生命のメッセージ」展	一般	2017.11.27 朝日新聞全国版
9	2017.12.7	A 市内 C 小学校 英語版上演会	A 市内 B 小学校 中・高学年	2017.12.7 OHK「プライムニュース」
10	2018.10.23	A 市内 J 高校 「命の大切さ啓発活動」	J 高校生徒	
11	2019.1.24	おかやま犯罪被害者支援 ネットワーク「あした彩」として紙芝居贈呈式	ネットワーク団体	2019.1.24 山陽新聞岡山市版

(2) 絵本データ配布活動

2018 年度からは、本学のホームページから図 3 の「まおちゃんの新しい靴」絵本データの入手希望を受け付け、サークル活動の一環として学生は PDF データを無料配布している。配布方法は、本学ホームページに設置された「まおちゃんの新しい靴」から「関連リンク」をクリックすることで、申請ページに入ることができるようにしている。

図 8　本学ホームページ「まおちゃんの新しい靴」特設サイト

図 9　絵本データ配布サイト

「まおちゃんの新しい靴」絵本データ希望

後日、メール添付で絵本データを無料でお渡しいたします。
※「boranthiaai@gmail.com」のメールアドレスを受信できる設定にして下さい。
絵本データは、PDFデータでお渡しいたします。携帯メールアドレスはエラーになることが多いので、添付ファイルが受け取れるパソコンメールアドレスを入力してください。
※これまでに携帯メールで登録してくださった方へ：エラーになってデータが送信できません。再度パソコンメールアドレスでご入力をお願い申し上げます。

なお、制作にあたり、「岡山ももたろうライオンズクラブ」のご協力をいただきました。

* は必須項目です

* お名前

姓　名

ご所属

* メールアドレス

(確認用)

※こちらに入力していただいたアドレスにPDFファイルを送信いたしますので、パソコンメールアドレスをご入力ください。

図 10.「まおちゃんの新しい靴」絵本データの申込サイト

申込サイト開設後、2018 年末までに 9 件のお申し込みがあり、サークル活動の一環として、データ送信活動も行っている。

考察

本サークルが作成した紙芝居の上演活動が、犯罪被害者に対する支援としてどのような役割を果たしているのかを検討する。白岩ら(2017)は、警察による犯罪被害者政策が進んだ結果として交通事犯や殺人などの遺族にとって「情報提供」「配慮」「捜査」の観点については好転していることを見出した。これらの観点は、警察官に対する遺族の信頼を促進するとともに、遺族の心理状態や司法制度一般への信頼をも好転させうると指摘している。このように、警察との信頼関係は、被害者にとって非常に重要であることがうかがえる。また佐藤(2003)は、飲酒運転によって息子を亡くしたご夫婦へのインタビューを通して、「情報提供」「精神的ケア」「セルフ・ヘルプ・グループ」が重要であり、被害者遺族にとって周囲の他者との間に起きるリアリティ分離のために、思いを語れないことが問題であると指摘している。警察との信頼関係ができ、「セルフ・ヘルプ・グループ」以外の場においても安心して思いを語れる場が広がることも重要な支援の形なのかもしれない。間接的ではあるが、犯罪被害者の思いの一部を形にした紙芝居上演は、遺族の気持ちを代弁することにつながるだろう。また、県警における「あした彩」は各大学と連携し、犯罪被害者との間をつなぐ役割を果たしていることから、被害者遺族にとって大学生の活動に対して、好意的な印象を抱きやすいのではないかと推測できる。

岡村(2015)は、犯罪被害者支援をする上で「専門家」が被害者を「対等」でない救済者一被害者関係にもとついて救済することによって、被害者側にとって 2 次被害を与える加

害行為であることを強調している。大学生ボランティアは「専門家」ではない立場であり、犯罪被害者との関係においても対等に近い形で支援ができるだろう。

滝口・伊藤(2010)は、犯罪被害者遺族 11 人に対して「被害者の会」での運動参加・継続過程に関するナラティブを質的する分析し「事件にまつわる思い」と「遺族が運動に参加し始め、活動を続けていく過程」の 2 つのカテゴリーを見出した。しかし、活動していても「つらく苦しい気持ちは変わらない」などの心理的負担も指摘している。犯罪被害者が次の被害者や加害者を作らないよう社会運動を展開してく場合、心理的負担を抱えながら活動することは継続するうえで困難である。マンパワー不足になるときに、大学生ボランティアを活用することにより、犯罪被害者の活動が継続・発展できる。

一方、ボランティア活動をしている大学生側の心理的影響について検討する。伊多波・首藤(2016)は、大学生 300 名を対象にアンケート調査をし、大学生はボランティア活動に参加することで「自分自身の成長」と「学習効果」の両方の成果を期待していることを明らかにした。ボランティアに参加する学生は 1 割程度であるが、ボランティア活動経験が有る大学生は、ボランティア活動経験が無い大学生よりもボランティア活動を肯定的に評価している(岡鼻,2016)。また、大島(2019)が「あした彩」で犯罪被害者支援ボランティアをしている大学生とボランティア活動をしていない大学生にアンケート調査を行い、ボランティア経験のある学生のほうが有意に高い充実感を得ていることを明らかにしている。本サークルにおいてオリジナルの紙芝居を用いて活動できることは、充実感を得る機会になるものと考えられる。また、紙芝居上演活動以外にも、図 3 の絵本データを無料で配布する活動をすることによって、国内外の方たちに活用してもらえることも充実感を高めることが期待できる。

活動する際、大学生であっても犯罪被害者が精神的に苦痛を与えない配慮ができることが前提である。中島ら(2009)は、犯罪被害者が周囲からの言動によって傷ついた体験（二次被害）を持つ場合が疾患を悪化させていることを明らかにしている。大学生による犯罪被害支援活動を実施する場合、事前の研修を行い、その後の継続した指導も必要であると考えられる。県警の「あした彩」は、大学教職員が在籍している学生への指導を行える立場であるため、大学生にとっても安心して活動できるのではないだろうか。

本サークル「犯罪被害者支援チーム」において作成した紙芝居を用いた活動においても、犯罪被害者支援という特性に応じた教員による指導が必要である。また、本活動を通じて大学生側にとっても他者に対する信頼感を高め、社会で活躍する人材として成長していく学びにつながることが期待できる。

今後の課題

今回は、本サークル「犯罪被害者支援チーム」が制作した紙芝居を中心に報告し、文献による考察を試みたが、この活動が犯罪被害者、上演をする側、上演を受ける側にとってどのような心理的影響があるのかについては明確な調査ができていない。

今後、上演活動を行う際には、アンケートなどを実施し、どのような影響があるのかについて詳細に分析していく必要があるだろう。

付記

１．紙芝居制作活動については、2016 年度に「岡山ももたろうライオンズクラブ」、2018 年度に「財団法人福武教育文化振興財団教育研究助成(教育活動)」から助成を受けて実施した。また、本サークル「犯罪被害者支援チーム」が参加している「あした彩」での活動について、2018 年 1 月 22 日に岡山県警本部より本学に対して感謝状をいただいた。
２．紙芝居のモデルとなった小谷真緒ちゃん(当時 7 歳)には、心からご冥福をお祈りするとともに、小谷真樹氏とご遺族に心から感謝申し上げます。そして高谷麻衣氏(ストーリー担当、2018 年当時 4 年生)、山本碧氏(イラスト・朗読担当、2018 年当時 4 年生)、山根亮子氏(デジタル化担当、2018 年当時 4 年生)、小林利子氏(英訳担当、2019 年当時 2 年生)、岡山県警本部県民応接課犯罪被害者支援室係長の藤原佐千子氏、その他、本サークルによる上演活動等にご協力くださったみなさまに深く感謝申し上げます。

文献

安達泰盛 (2009). 犯罪被害者支援における支援者の態度変容過程に関する一考察―ボランティアスタッフの体験の意味づけの変化に着目して― 佛教大学大学院紀要教育研究科篇, *37*, 55-72.

福井美貴・松村幸子(2003). 心的外傷後ストレス障害の回復過程の看護援助 ：犯罪被害者の思いの分析 日本精神保健看護学会誌, *12*(1), 22-32.

フリー音源素材「魔王魂」https://maoudamashii.jokersounds.com/(2019.1.17 最終確認)

伊多波美奈・首藤敏元(2016). 大学生におけるボランティア経験とボランティア活動に期待する成果、自己効力感、及び協調性との関連 埼玉大学紀要, *65*(2), 35-46.

金子進之助(2006). 犯罪被害者支援活動についての報告 別府大学短期大学部紀要, *25*, 99-105.

公益社団法人全国犯罪被害者支援ネットワークホームページ https://www.nnvs.org/network/sengen/(2019.1.17 最終確認)

中島聡美・白井明美・真木佐知子・石井良子・永岑光恵・辰野文理・小西聖子(2009). 犯罪被害者遺族の精神健康とその回復に関連する因子の検討 精神神経学雑誌, *111*, 423-429.

岡鼻千尋(2013). ボランティア活動経験が大学生のボランティアのイメージに及ぼす影響 心理科学, *34*(2), 68-76.

岡村逸郎(2015). 犯罪被害者支援における「対等」な支援者-被害者関係の社会的構築 犯罪社会学研究, *40*, 87-99.

岡山県警ホームページ http://www.pref.okayama.jp/page/492805.html(2019.1.17 最終確認)

大島彩菜(2019). 犯罪被害者支援における大学生の意識調査 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科 2018 年度卒業論文(印刷中).

埼玉県警ホームページ https://www.pref.saitama.lg.jp/a0001/news/page/2017/0129-02.html(2019.1.17 最終確認)

佐藤 恵(2003). 犯罪被害者の「回復」とその支援 犯罪社会学研究, *28*, 96-109.

山陽学園大学ホームページ「まおちゃんの新しい靴」特設サイト
http://www.sguc.ac.jp/profile/sanyolab/036(2019.1.17 最終確認)
山陽新聞「犯罪被害者支援へ学生連絡会発足　１０大学連携 情報交換や講演開催」
2017.11.21
山陽新聞「『あした彩』犯罪被害者支援１年　学生ボランティア活動拡大へ意欲」2018.11.21

高田治樹（2014）．大学生サークル集団への態度の探索的検討 青年心理学研究，*26*(1)，
29-46.
滝口涼子・伊藤冨士江(2010)．犯罪被害者遺族の被害者運動参加：エンパワメント・アプローチに着目して　社会福祉学，*50*(4)，55-68.